

## <巻頭言>



### 新年にあたってのご挨拶

橋 本 徳 昭\*

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様方におかれましては恙無く新年をお迎えになられたことと、心からお慶び申し上げます。

常々会員の皆様方には、当会議の活動、運営に一方ならぬお力添えを賜っておりますが、とりわけ昨年、恒常的な活動に加えて、5月に治安の面で問題があると懸念された南アフリカ、ヨハネスブルグでの第84回 ICOLD 年次例会に同伴者含め58名の方にご参加いただき、開催国を除いて JCOLD からの参加者が中国に次ぐ大型ミッションになったこと、また9月には、札幌で EADC を APG と併催し、13ヶ国（APG 域内12ヶ国、他にオランダ）333名の参加をみたことなどが特筆すべきことでした。とくに EADC と APG の共同開催という初の試みに聊か不安材料もありましたが、会員各社、団体の深いご理解、大きなご支援のお蔭で、ホスト国として誇れる会合になったと思っております。ご尽力頂いた皆様方に感謝申し上げます。とくに地元北海道の関係者の皆様方には会場運営、テクニカルツアーなどの準備、実施などにあたり、多大のご協力を頂戴し、開催を成功裏に導いていただきました。心から篤く感謝申し上げる次第です。

さて、昨年はこのように JCOLD として外向きの行事対応に追われる一年でありました。12月12日の「漢字の日」には、「今年の漢字」として「金」が選ばれたとのことでした。我々ダムの世界で「金」とは？と問いを廻らせてみましても、キンピカに輝くダムもなければ、コスト縮減に追われるご時勢ではカネが潤沢にダムに投資されたという話も聞かない。せいぜいのところ、JCOLD としては、対外活動で例年よりは多くのカネが必要だった年であったと言える程度かと思ったりもします。では、年を改め、今年はどうのような年になるのでしょうか？政治、外交、経済、安保などなど多くの課題が犇んでいる状況の真っ只中での年明けですが、「我々ダム技術者を取り巻く新年は」と申しますと、

- ① 平成21年度から始まったダム事業の進め方に関する議論も、以降粛々と行なわれ、昨年秋の時点で、検証対象となった83事業のうち既に79事

\* 一般社団法人日本大ダム会議 会長

業（継続54事業、中止25事業）の検証が終わり、残るは僅か4事業となっている。今後現在進行中のダム事業に大きな変動は余程のことがない限り生じないと思われる。

- ② 現在話題が徐々に大きくなりつつあるテーマとしては、既設のダムの再生、有効活用が挙げられる。これまでは国交省から「我が国の先進的な治水技術—運用しながらのダム再生—」というパンフレットが出されていたが、今年はいよいよそれが「ダム再生ビジョン」として形を成してくると聞き及んでいる。また、政治の世界でもダム再生、あるいはダム湖に太陽光パネルを浮かべるといった奇策も云々されており、従来の治水、利水から更にダム（湖）の有効活用に期待感を持たれる年になりそうである。大変良い話ではあるが、関係される皆様方には運用上、環境上のリスクにも最大限の想像力を働かせて、実現後のトラブルを事前に防止する手立ても併せてご議論いただきたいと切に願う。

といった状況がまず思い浮かびますが、いずれも国内での新規ダム事業が徐々に難しくなっていることの証とも申せましょう。

ダムという総合的な技術体系を今後とも保持していくには、もちろん保守、運営技術の重要性は言を待たないものですが、やはり若い技術者を厳しい環境下で早期に、トータルに鍛え上げるという点で、調査～計画～設計～施工～品質・工期・安全・工費管理の一連の業務を現実の種々の制約下でこなすことを迫られる新規開発に優るものはないのも現実であります。こうした観点から、海外への国産ダム技術の進出、さらにはダム事業への参画の可能性への期待に一段と拍車がかかるのではないかと推察されます。

JCOLDでは、一昨年度までに「海外ダム事業への技術協力と事業参入に関する検討部会」を設けて昨年一つの取りまとめをいたしました。さらに昨年度から新たに「ダム設計基準調査分科会」を立ち上げました。海外でのダム関連業務を実施するにあたっては、残念ながら我が国の基準をそのまま適用することには困難を伴います。また現行の基準も制定されて相当の年数が経過しており、この間の技術の進歩に伴い、CSGなどの新しいダムのコンセプトや先進的な調査・解析手法などが進展しており、海外での活動の幅を拡げるには、このような手法の取り込みが不可欠となりつつあります。こうした情勢を踏まえ、海外に雄飛しようとする会員の皆様方への参考となるような、state-of-the artを事例収集から試みようという検討分科会であります。我が国のダム技術者がglobal standardに立ち向かい、また我が国の技術をglobal standardに組み込ませる一助となることを狙っており、正念場を迎える今年、その成果を多いに期待したい。

最後になりますが、本年の会員の皆様方のご健勝、ご活躍をご祈念申し上げますとともに、本年も昨年同様に、JCOLDの事業運営にご理解、ご尽力賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。